

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00179

研究課題名（和文）西日本を中心とした来船清人の書画交流に関する基礎的調査研究

研究課題名（英文）Fundamental Research on the Scholarly Interactions of Qing Dynasty Literati Artists Who Came to Western Japan

研究代表者

呉 孟晋（Kure, Motoyuki）

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：50567922

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代から明治時代にかけて日本に渡航した清国文人、いわゆる「来船清人」をめぐる書画をととした中国と日本の文化交流の様相を明らかにした。とくに来船清人の「移動」とに注目して長崎や神戸と京都や大坂（大阪）、そしてその間をつなぐ岡山や広島などの中間地点に焦点をあてたことで、王治梅や胡鉄梅らに代表される明治期の清人の動きが、拠点と目的地を往還する、自転車の車輪の「スポーク」と「ハブ」のような対応関係を示していることがわかった。これまで「点」のみで把握していた彼らの文化活動を「線」および「面」でとらえたことで、活発な交流がおこなわれていた実態を浮かび上がらせることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、中国書画研究の視点に立って「日本からみた清朝書画史」を提示したという学術的意義をもつ。これまでの日本での明清書画研究は作家や流派に焦点をあてたものがほとんどであり、作品群として存在する「コレクション」の実相を検証するものはあまりなかった。来船清人の書画についてまとめたコレクションを調査して、彼らの動向を明らかにした本研究は、日本美術のなかで中国文化への憧憬が高まった江戸期および明治期の文人画の展開にその成果を還元するものである。美術作品をととして日本と中国の文化交渉の歴史の一端を明らかにしたことで、両国の文化交流をより一層促進することができるという社会的意義も有するであろう。

研究成果の概要（英文）：In the Edo and Meiji periods when Sino-Japanese cultural exchange had been limited, literati artists from the Qing Dynasty China, who were so-called “Raihaku-shinjin” in Japanese, fascinated many Japanese literati to learn the brand-new trend of Chinese art. This project was focused on their cultural exchanges through the research on the paintings and calligraphies of “Raihaku-shinjin”, so that it could reveal the aspects of their “traveling” from Nagasaki or Kobe, the port cities functioning as the gateways of Chinese culture, to Osaka or Kyoto, the cities prospering as the hubs of international cultural exchanges via Okayama, Hiroshima, the provincial cities in West Japan. The art of “Raihaku-shinjin” such as Wang Yemei (1831-?) and Hu Tiemei (1848-1899) who stayed in Osaka and Kyoto, and shuttled between cities of West Japan during the Meiji period, were considered as the last impact from China in the art history of Japan.

研究分野：中国絵画史

キーワード：来船清人 西日本 書画 文人 森琴石 野崎武吉郎 王治梅 胡鉄梅

1. 研究開始当初の背景

「来船清人」は長崎に入港する貿易船などで来日してきた中国・清朝の文人のことであり、20世紀初めに中華民国が建国されるまで、中国人との接触が限られていた江戸、明治期の日本において中国最先端の文化の気風を体現した存在であった。

来船清人の絵画制作に焦点をあてたモノグラフ研究については、鶴田武良氏による一連の業績がある(「来船画人研究」シリーズとして1979年から1988年にかけて『國華』や『美術研究』にて発表)。また、文化交流史的観点からは、柴田清継氏が彼らの活動について詳細な復元をおこなっている(たとえば、蒋海波氏との共著である「明治期高知における日中文人の交流：旅の詩人王治本を中心として」『日本語日本文学論叢』第7号(武庫川女子大学)2012年など)。

しかし、江戸期の来船清人の多くは船主や商人であり、書画揮毫はあくまで副業であった。明治期の清人も売画売文の機会を求めての側面がある。こうした「正統」ではない中国文人たちをとおして形成された近世・近代における中国認識はいかなるものであったのか。鶴田氏をはじめとする先行研究を発展的に統合し、日本にもたらされた中国書画から日中文化交流の軌跡を総合的に考察する研究は、いまだに本格的に着手されていないのが現状であった。

報告者は平成27年(2015)度からの若手研究B「長尾雨山の中国書画受容に関する基礎的研究」にて、大正、昭和期のいわゆる「新渡り」の中国書画鑑定をとおして、日本における中国認識の変化を考察した。本研究はいわば若手研究B課題が対象とした時代をさかのぼり、より広い時間軸で検討するものである。すでに平成29年(2017)春には野崎家塩業歴史館に関連するシンポジウムで明治期の来船清人の代表格である王治梅の画業について発表したことにより、本研究を着想する端緒を得た。

2. 研究の目的

来船清人をめぐる書画をとおして、中国と日本の文化交流の様相を明らかにすることを目的とした。日本での中国書画の受容は、舶載品として将来された中国書画、すなわち「唐物」にたいする尊崇と、直接的な往来による「唐人」との交流の活発化を交互に繰り返しながら、日中間に存在する文化情報の格差を次第に縮めてゆく過程であった。

そのなかでも清朝に来日した来船清人たちの多くは専門の書画家ではなく、もしくは専門であっても著名な作家でなかったゆえ、沈南蘋や、伊孚九、張秋谷、費漢源、江稼圃の「来船四大家」をのぞいて、その書画は美術作品として評価されることが少ない傾向にあった。しかし、明治期の王治梅や胡鉄梅の作例のように傑出した出来栄をみせるものもあり、実作品を数多く精査することが不可欠である。

中国への玄関口となった長崎や神戸と、文人文化の中心地であった京都や大坂(大阪)、そしてその間をつなぐ交通の要路として繁栄した岡山や広島など山陽地方を含めた西日本地域に焦点をあて、来船清人の実作品をできるだけ多く調査することにより、日本における中国文化への憧憬とその受容の様相を明らかにすることをめざした。

3. 研究の方法

来船清人の動向をうかがうための基礎的研究として、おもに西日本を中心に日本各地に現存する来船清人の書画を対象とした作品調査をおこなった。具体的には、京阪神、中国地方、東京の美術館や博物館、資料館、財団法人、個人宅などを対象とし、各所の文人書画コレクションに含まれる中国絵画について悉皆調査を実施し、未紹介の作品および関連資料を発掘することに努めた。調査を重ねてゆくなかで、森琴石ゆかりの森家や野崎家塩業歴史館(岡山県倉敷市)さらに京都を中心に個人所蔵家4氏のコレクションなど、所蔵者の同意のもとでいくつかの拠点を定めて、集中的かつ継続的に調査を実施した。できるだけ多くの作品を熟覧することで、各所に点在するコレクションを「線」で結んで実像をつかむように留意した。

ただし、コロナ禍の3年間は対面での実作品の調査をおこなう機会が大きく制限されたため、図書館が所蔵する漢籍の詩文集や明治期の新聞を渉猟する文献調査もあわせて実施した。

4. 研究成果

来船清人の書画作品について拠点を定めて重点的に調査することによって、とくに明治期における日中交流の様相の一端を明らかにすることができた。それはおもに三つの特徴にわけることができる。

一つは、「スポーク」と「ハブ」とでもいうような自転車の車輪にも似た明治期の来船清人た

ちの行動様式である。

調査開始当初は、江戸期から明治期まで、長崎を起点に京(京都)、大坂(大阪)に至るまで、山陽道などいくつかの街道に沿って直線的に「書画の道」が形成されていたと推測し、各地域に点在するコレクションを調査することで、これまで「点」のみで把握していた彼らの文化活動を「線」および「面」として把握することをめざした。しかし、江戸と明治では当然のことながら同じ清人でも来日目的や行動範囲はちがってくる。調査をすすめてゆくなかで、当初の想定とはちがって、江戸期の来船清人の書画は長崎での制作が主であり、その後の流通は「古渡り」や「中渡り」など日本に将来された中国書画のあり方とさほど変わらないと考えるにいたった。一方で、明治期は「スポーク」と「ハブ」のように、拠点(ハブ)を定めてそこから各地の素封家のもとに揮毫に出かけるという行動様式がみえてきた。

江戸期の来船清人は、沈南蘋らごく一部の画人をのぞけば、そのほとんどは船主や副船主といった長崎貿易関係者であった。日本での活動の場も長崎の出島にとどまり、漂流して帰路に富士山を描いた方西園をのぞいて、日本各地を訪ねることはかなわなかった。それゆえ、来船清人の書画は日本各地で大変珍重されていた。たとえば、個人コレクター調査のなかでは、程赤城や費晴湖、沈萍香、王応曾、余嵩といった名家をはじめとする来船清人の書簡や文書も含む書画約50枚が六曲一双の屏風に表装されたものが確認できた。書画制作が本業ではなかった来船清人のあらゆる筆跡が珍重されていた様相がうかがえる。

幕末の開国政策のなかで、そうした状況が大きく変わったのは周知のとおりである。安政5年(1858)の安政五カ国条約にて「外国人遊歩規定」が設けられ、外国人が外国人居留地から外出して自由に活動できる範囲を最大10里(約40キロメートル)とした。幕末、明治期の来船清人はこの機に乗じて、太平天国以降の江南地方における混乱から逃れたり、書画揮毫を生業とする職業文人として日本に売文売画の機会を求めようとしていたりして、来日してきた。

ただし、区域外に外国人が出るにはかなりの制約があり、内地旅行免状が必要であった。そこで、大阪にいた森琴石のような中国に関心を寄せた南画家のなかには、清人たちの身元を引き受けて旅行許可書を手配するなど彼らの滞在を支援する、いわば「マネージャー」のような存在が登場する。大阪や京都、神戸など、数多くの清人が長期滞在した都市は「ハブ」の役割を果たしたのである。京阪神のなかでもとくに大阪が拠点であったことは、作品にある款記や当時の新聞広告などからうかがえる。

森琴石にゆかりのある森家での調査では、胡鉄梅が描いた琴石の肖像画をはじめとする中国書画を確認し、琴石たちは書画家同士、親密な交際をもっていたことを明らかにした。その後の調査では書画作品以外の資料も調査し、大量に残る琴石の下絵のなかに黄檗系をはじめとする中国書画の写しがあったり、王治梅や胡鉄梅の下絵が残されていたりしていることを確認した。さらには伊孚九や陳逸舟、沈萍香らの山水図の写しもあり、琴石が直接交流した清人よりも時代が上る画人たちからも積極的に画法を学んでいたことがわかった。

一方、岡山や広島といった西日本の中核都市には中国文化に関心をもつ素封家が多くいた。彼らは積極的に清人を迎え入れ、京阪神から旅してくる彼らの目的地として「スポーク」の先端の位置にいたといえる。

岡山・倉敷の野崎家塩業歴史館では胡鉄梅や陳曼生ら明治期の来船清人の作品を数十点調査し、当時の来船文人の筆頭である王治梅のほかに多くの清人が塩業で財をなして煎茶を嗜んだ野崎家を競うかのように訪れていたことがわかった。さらに、未表装作品(めくり)の調査も同館や岡山県立美術館の学芸員の協力のもとで実施し、全部で約200点の作品を確認した。これらは幕末から明治、大正、昭和初期にかけて野崎家が収集したものであり、なかでも明治期以降、野崎武吉郎は積極的に清人を招いて作品を買い上げていった。

二つ目は中国をはじめとする書画鑑定において、来船清人の「目利き」としての役割を果たしていたことである。これは森家と野崎家という二つの「点」の調査の目途が立ったところで、その中間を埋めるような所蔵先をいくつか選んで調査をおこなったことでわかったことである。たとえば、福井県越前市の陽願寺には来船清人の代表格である沈南蘋の花鳥図があるが、その箱書きは明治期に陳曼寿がしたためたものであり、時代を超えた来船清人の「つながり」を確認した。また、個人宅にある酒井抱一の「月雲図」には、明治25年(1892)、秋田の六郷にいた王治本が賛を寄せている。

三つ目は、日中の文人たちが書画を「合作」するなかで交友を深めていったという様相である。たとえば、弘化元年(1844)に清人七家が書画を寄せ書きした軸は、頼山陽の門弟と称した沈萍香や川原慶賀とつながりのある江元熾、長崎に出入りした鄭敬安らの名がみえる。文久2年(1862)の軸は王克三や徐雨亭らの書画に大分出身の帆足杏雨も水仙の画を添えており、長崎あるいは九州での日中の文人たちの出会いが想起される。

また、広島の海の見える杜美術館では「名家書画帖」のなかに王治梅や陳曼寿、王鶴笙、馮鏡如、馮雪卿、郭少泉らの作が含まれていることを確認した。長山孔寅、上田公長、「松年」落款のある「尉と姥、鶴亀」は文化14年(1817)に江芸閣や朱柳橋、楊少谿ら長崎の清人のほかに蘭人が着賛した三幅対で、東東寅の山水図に文政5年(1822)、周藹亭や朱開圻が薩摩の片浦で題詩を記した一幅も確認できた。清人の字句が珍重され、数多くの「合作」がなされていた実態から、清人が日本の文人交友圏のなかにいたことがわかった。

本研究成果の公開においては、当初の計画で掲げた調査の成果を展示にいかすという目標は報告者の転職により実現することはできなかった。しかし、これまで調査を重ねてきた廉泉旧蔵

の「小万柳堂扇面書画集」にかんして、令和5年(2023)夏に東京国立博物館で企画された展示に関与したり、日本の伝統文化にかんする論文集に寄稿したりした。後者の論文では、前述した森琴石に焦点をあて、作品と文献、両方の調査を連環させるかたちで明治期の清人の動向を示したものであり、本研究で提示した「書画の道」の実態を明らかにした。

海外での成果公開についても、令和4年(2022)11月に台湾の中央研究院中国文哲研究所にて森琴石の中国絵画学習にかんして発表するなど、いくつかの国際シンポジウムで研究発表をおこなうことができた。

さらに、ほかの研究プロジェクトとの連携もすすめた。たとえば、野崎家塩業歴史館での調査にかんして、報告者は「備前児島の野崎家に伝わる文化財の総合調査」(研究代表者：永島明子氏)の研究分担者にもなっている。同館所蔵の日本絵画調査への継続的な参加によって、「新南画」をはじめとする明治、大正期の日本の文人画における中国趣味の傾向を確認することができた。

本研究から導き出される今後の展開としては、幕末以降の近代日本において中国に渡航した日本人書画家の動きという「逆方向」の動向を詳らかにしてゆくことが考えられる。この分野は報告者も調査に協力した衣笠豪谷や内海吉堂の展覧会が最近相次いで開催されており、最近注目が集まっている。他機関の研究者との連携を深めることにより、日本と中国相互の交流関係をより精緻にかつ俯瞰的に明らかにしてゆくことができるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 呉孟晋、陳捷	4. 巻 44
2. 論文標題 森琴石ゆかりの中国書画および書簡資料について：来舶清人との交流を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 字叢	6. 最初と最後の頁 79, 109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 -
2. 論文標題 田能村直入の中国憧憬から思ったこと	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『田能村直入とその子弟展』図録（天門美術館・山添天香堂）	6. 最初と最後の頁 106, 107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 139
2. 論文標題 「臥遊千里図画冊」（唐招提寺蔵）について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大和文華	6. 最初と最後の頁 1, 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 -
2. 論文標題 交友と協業のコレクション：野崎家と森家にある来舶清人の書画について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『関西中国書画コレクション研究会設立十周年記念国際シンポジウム報告書 中国書画コレクションの時空』（関西中国書画コレクション研究会）	6. 最初と最後の頁 139, 152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 -
2. 論文標題 餐香宿艶図巻 沈銓筆（作品解説）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『御即位記念 特別展 皇室の名宝』図録（京都国立博物館）	6. 最初と最後の頁 204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 -
2. 論文標題 新文人のまなざし：上野有竹の書画収集について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『仏教美術研究上野記念財団設立五十周年記念誌 新聞人のまなざし：上野有竹と日中書画の名品』（仏教美術研究上野記念財団）	6. 最初と最後の頁 65, 71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 -
2. 論文標題 近世戒律復興期における「唐物」のあり方：唐招提寺蔵十六羅漢像をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『凝然国師没後七百年 特別展 鑑真和上と戒律のあゆみ』図録（京都国立博物館）	6. 最初と最後の頁 254, 256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 -
2. 論文標題 花鳥図 沈銓筆（作品解説）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『創建550周年記念 御堂 陽願寺の名宝』展図録（越前市武生公会堂記念館）	6. 最初と最後の頁 79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 46
2. 論文標題 長尾雨山と鄭孝胥の交友：京都国立博物館と「長尾雨山関係資料」にある鄭孝胥の作品と資料について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 書論	6. 最初と最後の頁 113, 130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 45
2. 論文標題 「長尾雨山関係資料」のこれまでとこれから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 書論	6. 最初と最後の頁 50, 53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 -
2. 論文標題 観音図帖 陳賢筆 隠元隆琦題 (作品解説)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『京都国立博物館寄託の名宝：美を守り、美を伝える』(京都国立博物館)	6. 最初と最後の頁 108, 109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 -
2. 論文標題 山本竟山と長尾雨山の交友：「長尾雨山関係資料」にある山本竟山資料について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 陶徳民・中谷伸生編著『山本竟山の書と学問：湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク』(関西大学東西学術研究所)	6. 最初と最後の頁 71, 106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 84
2. 論文標題 漢学与中国学のはざまで：長尾雨山と近代日本の中国書画コレクション	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SGRAレポート	6. 最初と最後の頁 26, 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 -
2. 論文標題 「陳老蓮画蘇長公像」について：長尾雨山関係資料のなかから	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『山本竟山の書と学問：湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク』展図録（関西大学博物館）	6. 最初と最後の頁 23, 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 -
2. 論文標題 長尾雨山と海上文人的交往	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『使節・海商・僧侶：近世東亜文化意象伝衍過程中的の中介人物 国際学術研究会予稿集』（中央研究院中国文哲研究所）	6. 最初と最後の頁 1, 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 -
2. 論文標題 上見る鷹：斉白石の鷹図をめぐる	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『中国近代絵画の巨匠：斉白石』展図録（広西美術出版社）	6. 最初と最後の頁 290, 297
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 314
2. 論文標題 須磨収蔵与森岡収蔵：京都国立博物館蔵齊白石作品	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 典藏：古美術	6. 最初と最後の頁 100, 105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉孟晋	4. 巻 -
2. 論文標題 王冶梅筆春山雨霽図、孟涵九筆和歌扇面（作品解説）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『平成30年度独立行政法人国立文化財機構年報』（独立行政法人国立文化財機構）	6. 最初と最後の頁 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 呉孟晋
2. 発表標題 書斎図にみる清玩のあり方：みえない古代を想像する
3. 学会等名 日独二国間学術交流ワークショップ「美術史学・考古学から見た伝統東アジアにおける「見えない」ものの変容」（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 呉孟晋
2. 発表標題 臨摸与写生之間：試論森琴石的中国絵画学習
3. 学会等名 中央研究院中国文哲研究所「東亜文化意象の博物書写与物質文化」学術研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 呉孟晋
2. 発表標題 交友と協業のコレクション：野崎家と森家にある来船清人の書画について
3. 学会等名 関西中国書画コレクション研究会設立十周年記念国際シンポジウム：中国書画コレクションの時空（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 呉孟晋
2. 発表標題 仰慕呉昌碩的京都文人
3. 学会等名 万年長春：海上千年書画国際學術研討会（上海博物館）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 呉孟晋
2. 発表標題 上野コレクションにある羅振玉資料について
3. 学会等名 第7回関西大学東西学術研究所研究例会「羅振玉の学術と藝術への新しいアプローチ」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 KURE Motoyuki
2. 発表標題 Reconstructing the Style of Literati Painting : the Paintings of Wang Yemei and Hu Tiemei, Chinese Artists Who Came to Japan in the Early Meiji Period
3. 学会等名 AAS in Asia 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 呉孟晋
2. 発表標題 長尾雨山与海上文人の交往
3. 学会等名 使節・海商・僧侶：近世東亜文化意象伝衍過程中的の中介人物 國際學術研討会（台湾・中央研究院中国文哲研究所）（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 呉孟晋
2. 発表標題 向上看的鷹：以齊白石画鷹談起
3. 学会等名 北京画院齊白石芸術國際研究中心2018年会及學術研討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 京都国立博物館編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 101
3. 書名 京都国立博物館須磨コレクション図版目録 中国近代絵画1 齊白石	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------